

医療法人済恵会 広報誌

オアシス67号

広報誌オアシス 制作 広報委員会
〒379-0116 群馬県安中市安中3532-5
Tel (027) 382-3131 FAX (027) 382-6568

平成25年新年のごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。本年が皆様にとりまして、素晴らしい年になるよう祈念しております。年末には政権交代がおこり、日本の政治もなんとか落ち着いて良い方向に向かうことを願っているのは、私だけではないと思っております。とくに社会保障と税の一体改革の中身についてはこれからも注視し、より良い社会保障体制ができることを願っております。

さてそんな状況の下、当法人では4月の開設を目指し新たなデイサービスセンター“さくら”を建設中です。安中市築瀬の“ジョリエやなせ”の隣地に建設しており木造平屋建ての広々とした気持のよい施設を目指しております。須藤病院が運営するデイサービスですので医学的にも充分すぐれたサービスを提供したいと考えております。看護師、理学療法士も常駐させリハビリを中心に利用者の方が安心して過ごせる施設にしていきたいと思っております。

また利用時間についても一律ではなく、利用者の希望に沿った時間調整も行いたいと思っております。つまり「午前中だけ利用し、お風呂に入りリハビリを行い、帰宅してから自宅でお昼ご飯を食べる。」ということも可能にしたいと思います。これとは逆に午後からのリハビリも、もちろんOKです。リハビリはとにかく続けることが、体力維持にはとても重要です。

ここで自分自身の体験をご紹介します。私も数年前、足の痛みに悩まされる時期がありました。ふと自分の太ももを見ると何となく細くなっており、筋張っていることに気が付き。脚力だけは自信があったのに日頃の運動不足、姿勢の悪さなどが原因で腰椎の変形が強くなり徐々に下半身に影響が出たものでした。当院の菅根理学療法士にストレッチの方法を教わり、筋力アップのためベンチプレスやレッグカール、腹筋の強化などにつとめようやく症状が改善してきております。医者がこんなことを言うても思いますが、もっとも説得力があるのは自分の経験であることは間違いありません。健康に年を重ねるには自分自身でできることを地道に休むことなく続けることが重要と思っております。デイサービスセンター“さくら”が、その手助けに少しでもなればと考えております。どうぞご期待下さい。

ノロウイルス、インフルエンザウイルスなどが猛威をふるっております。まだまだ寒い日が続きますので体に気をつけ過ごされることを改めてお願いし、新年のあいさつにさせていただきます。

病院長
須藤 英仁



看護部 新年のごあいさつ



看護部長 藤原 美津子

新年のご挨拶を申し上げます。今年もよろしくお願いたします。

昨年はロンドンオリンピック金メダルや世界的な不景気、民主党から自民党へ政権変更等がありました。また、高齢社会で医療費比率も高まる一方で、65歳定年制は進んでいます。景気が回復し若者の就職率が上昇して欲しいと願います。

さて、医療の役割は、一人一人が望む健康で安心した生活を送れるように援助する力を発揮することです。その専門性を発揮するために、個々が自分の能力を高める努力をすることは法律でも義務付けられています。各々が専門性を発揮し、質の高い医療を提供するチーム医療が必須です。看護においては既に20弱にも増えた認定看護師や専門看護師、間もなく法的に制度が整うであろう特定看護師を現場に活用できるようにすることが必要です。看護師はなんでもできるという印象が強かったと思いますが、患者さんに最適なように専門的な状況判断と実践ができることが大事です。一人一人が自らのために時間やお金も使い、能力向上の努力をすることです。

専門書を求める行動や、自分の目指す方向を選択し、研修を受けることも入ります。これは実は内発的動機づけにも繋がることでもあり、充実感を得ることにもなると思います。看護部は現在、各個人のスキルアップ支援体制の整備に向けて動き出しています。当院の規模や診療形態等の特徴から制限はありますが、今後は専門性を目指すか、それともジェネラリストか、あるいはマネジメントか等選択し、その内容を深めていくことにもなります。「エドワード・エル・デシ」は膨大な研究結果から、人のモチベーションは自律が重要な要因であると述べています。自分のことを自分で選択することが成果につながりやすいといえます。

しかし、何にも増した重要なことは、いずれにしても看護の基本は共通しており、患者さんに温かく思いやりのある優しい態度が、患者さんの病気に取り組む意欲を引き出すことに繋がるということです。同時に、コミュニケーション能力を高め、表現力を磨くことです。心に余裕を持ち自分の人間性を豊かにすることが必須条件です。成果は患者さんに感謝していただく結果にもつながると確信しています。それが私たちのエネルギーのもとにもなります。これからも地域の皆様に信頼して利用していただけるよう努力していきます。今年もどうぞよろしくお願いたします。

デイサービスセンター“さくら”

1月15日 現在の建設現場の様子です。
屋根の取り付けも終わり、内装工事が始まります。



脊椎分離症の検査

～MRI検査が有効な症例について～

診療放射線技師長 櫻井 厚也

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いたします。年頭のご挨拶で病気の話はどうかと思いましたが、今回は私自信が中学時代に罹患(りかん)したことのある「脊椎分離症」という病気についてお話ししたいと思います。

この脊椎分離症とは、小中学生から比較的若い世代の激しいスポーツをしている人に多くみられ、成長期の腰痛の50%を占めると言われています。また、最近では腰の曲げ伸ばしやヒネりを繰り返すことによる疲労骨折ではないかとも言われていますが、一度分離してしまうと腰椎の連結が不安定になり、分離すべり症に移行して慢性的な腰痛と下肢痛を来すこともあります。(図1)

私がMRIに関わった20年以上も前から、この脊椎分離症が「分離」してしまう前に発見できないものかと、若い世代のMR検査のたびに注意深く画像チェックしてきましたが、どの患者様も既に分離して時間が経過し、初期治療の段階を過ぎてしまった方ばかりでした。今回、整形外科・柳澤治先生のご指導の下、いろんな事を教えて頂き、昨年末に2例見つけることができました。(図2白丸部)

いずれもレントゲン写真では正常で、どちらも早い時期に来院され、MRIを行ったことで、極々早期に発見できたため、専用のコルセットでしっかりと固定しておけば、分離することなく骨が固まり治癒するものと期待しております。小さいお子さんにMRIまで行う必要はあるのかと躊躇(ちゅうちょ)される先生も多い中、改めてその必要性を実感した瞬間でもありました。患者様は、年齢も違えば症状や程度も違います。これからも患者様ひとりひとりに適した検査を行っていきたいと感じました。当院の放射線科には現在5名の技師がおり、それぞれ得意分野があるように思えますが、どの検査でも最高の技術を提供できるよう努力していきたいと思いますので、これからもよろしくお願い致します。

